



年間第 21 主日 (マタイ 16:13-20)

わたしはあなたに天の国の鍵を授ける

「わたしはあなたに天の国の鍵を授ける。」(16・19) これまでよく見えてなかった部分に照らしを感じましたので、ペトロに託されたこの「天の国の鍵」について考えてみたいと思います。

先週、前半と後半でお休みをいただきましたが、前半は平戸地区の司祭 5 人で、大分と熊本を巡ってきました。大分では浜口司教さまを表敬訪問し食事をご一緒させていただきました。熊本では長崎教区からの司祭 2 人に会って食事をして元気づけてきました。

平戸地区に 8 人の司祭がおります。地区長神父さまから「夏休み中に一緒に出かけませんか」と誘われて、日程の折り合いが合ったのが 5 人でした。出かけてみて分かったのですが、わたし以外は簡単に言う「温泉好きの神父さま」でした。

初日、黒川温泉の何とかと言う露天風呂に行き、2 日目は阿蘇の何とか温泉に行きました。帰りの 3 日目も阿蘇の温泉に行きかけたようですが、2 つの教会で葬式が入り、朝 8 時からまっすぐ帰りました。わたしは温泉に入っても構いませんが、温泉に入らなければ悔いが残るという人間ではないので、お付き合いで参加したということです。

ただ、温泉の名前とお土産で聞き捨てならない物があると知りました。「はげの湯温泉」という温泉があって、その旅館のお土産で「せんべい」と「ソーダ」が有名なのだそうです。名前が傑作なのです。「はげませんべい」と「はげソーダ」と言うのです。もう禿げているわたしは、大変興味深いお土産だと思いました。今度先輩方と旅行した時は、はげの湯温泉旅館に行ってみたいと思います。

福音朗読に戻りましょう。イエスはペトロに「わたしはあなたに天の国の鍵を授ける」とおっしゃいました。鍵は大切なものです。最近わたしにとっての鍵は、「閉めるためのもの」ではなく、「開くためのもの」という思いが強くなってきています。

旅行に出かけて、旅先の宿で鍵を預かった時、その鍵は開くためのもののはずです。最近の部屋は、オートロックなので、勝手に閉まります。部屋に鍵を置いたままロックがかかり、フロントに迷惑をかける経験をした人もこの中にはいるでしょう。

また、スマートフォンという種類の携帯電話をお持ちの方は、暗証番号や指紋認証で鍵を開けて使用するのが体験しているでしょう。基本的にスマートフォンは、他人に勝手に使われたりしないようにロックがかかっているのです。ここでも暗号や指紋は開くため、使用を可能にするために使います。

ペトロに託された「開くための鍵」とは何でしょうか。「閉じるための鍵」ではなく、「開くための鍵」。わたしは思い切って「それはイエス・キリストである」と考えてみました。イエスこそ、地上で罪につながれていた多くの人を解き放ち、復活して天の国の門を開いてくださ

ったからです。

ほかに、救いから遠ざけられているとされていた異邦人にも扉を開き、心を頑なにする律法学者たちにさえ、警告の言葉をもって解放の道を示されたのです。「あなたたち律法の専門家は不幸だ。知識の鍵を取り上げ、自分が入らないばかりか、入ろうとする人々をも妨げてきたからだ。」(ルカ 11・52)。このイエス・キリストをペトロは「天の国の鍵」として預かったのではないのでしょうか。

加えて、鍵を預かる人はそれにふさわしい責任を求められます。開け閉めして中にあるものを出し入れしたり管理します。ペトロにも責任が伴います。イエス・キリストという鍵は、すべての人に天の国を開く鍵ですが、それはこの世が望むような権力と結びつく鍵ではありません。十字架に死に、復活して扉を開く鍵です。

当然この鍵を預かるペトロも、権力が天の国を開く鍵なのではなく、十字架上に死に、神によって復活させられる道が天の国を開く鍵であると理解しなければなりません。イエスはペトロが理解に達することができると信じて、天の国の鍵を授けたのです。今は理解できないとしても、ペトロの生涯全体をかけて天の国の鍵がどのようなものであるかを理解し、管理者となっていきます。

天の国の鍵を授けられたペトロは、これから天の国を開く鍵となる生き方を歩みます。それはイエスに倣う生き方です。12使徒の中でいちばん素朴で真っ直ぐなペトロが、教会の先頭に立って、教会が歩いていくべき道、十字架を背負って、復活を信じて生きる道を歩みます。

わたしたちの未来も、ここに描かれています。天の国の鍵を授けられたペトロと一つになって、この世を生きる必要があります。同じ生き方を人々に示すことで、わたしたちの知る天の国の鍵はこのような生き方ですと、証をします。

この世を謳歌するような生き方ではないかもしれませんが、けれども、天の国の鍵を見失う生き方よりも優れています。わたしたちが自分の生き方で天の国の鍵を保って生きることが大事だと知らせるなら、すべての人に対してわたしたちが鍵を握っている人間となれるのではないのでしょうか。